

ソーラーカー・イタリア「レバンテ計画」 走行日記

鍵谷修二

はじめに

本学は、手作りソーラーカーで、2001年9月に中国シルクロードを走り、2003年8月には北海道一周を実施してきました。そして、2006年9月、学校法人神野学園創立40年並びにイタリア国立フェラーリ工業専門学校との交流提携5周年の共同記念事業として『レバンテ計画』と銘打って、イタリアをソーラーカーで走る計画が実施された。

この計画は、本学のソーラーカーと、フェラーリ工業専門学校が製作したソーラーカー、また、同校の呼びかけで参加をした2チームの車両（燃料電池車とハイブリッド車）と一緒に、ローマからイタリア北部のマラネロまでのおよそ600kmを走行しながら、環境保護の啓蒙と両国親善を目的としたものである。

私は、この計画におきまして、走行隊の言わばマネージャーとして、みんなができるだけ走行に集中できるよう支援をするために参加いたしました。

よって、本稿は、出発からゴールまでを、ソーラーカーの性能、また、技術的なことについてはここでは触れずに、その行程を日記風に記したものである。

2006年9月1日（金）

学生6名、教員4名、職員1名、委託職員1名、本部1名、通訳1名、報道関係等4名、及び学園理事1名の総勢19名は、中部国際空港より10:25発ルフトハンザ航空 LH737便にて一路イタ



リアへと向かった。機上での学生たちは、終始リラックスをしていたが、今後のことを思うと「少しは緊張してくれよ」と、さえ思えた。

私たち一行は、フランクフルト空港を経由しボローニャ空港に無事到着した。時刻は19:00が少し前であった。日本との時差は7時間、およそ15時間半の長旅であった。

少々疲れた面持ちで空港ロビーに出ると、そこにフェラーリ工業専門学校ニコ校長がとびっきりの笑顔で歓迎してくださっている姿があった。

一行は、ニコ校長と共にバスに乗り、およそ1時間程でマラネロに着いた。その後夕食をとり、ホテルに入ったのは23:00をまわっていた。いよいよ明日は、日本から送ったソーラーカー『ソル・レバンテ号』（以下S・R号）との対面である。とりあえず、シャワーでも浴びて寝ることとした。

2006年9月2日（土）

ホテルで朝食を摂り、私たちは、ホテルから程近いフェラーリ工業専門学校（以下フェラーリ校）に歩いて向かった。学校に着き、校長から今後についての説明を受けたが、その中で、S・R号本体は届いているが、後に日本から送った荷物がまだ着いておらず、ミラノのある場所に止まっているとの報告を受けた。その中には、ソーラーカーの部品および工具類も含まれており、みんな様に不安顔となった。

イタリア人の国民性なのか事の重大性に気付いていないのか、悠長に構えている姿に、少し腹立たしくも思えた。

そんな中、山田理事提案でとにかく直接ミラノまで行って、貰って来る事とした。ただ、土日は休みとの事で、月曜日（9/4）の朝一番にミラノに向かい、ソーラーカー走行の出発地であるローマまで届けることとし、野田氏とフェラーリ校のエミリアさんがそれにあたることとなった。



コンテナを開ける学生たち

すったもんだした後、学生、教員たちは、届いているコンテナを開け、ソーラーカーと再会した。

しかし、三輪の内一本のタイヤが、輸送に伴う梱包時に打ち付けられた釘のため、パンクしていたのであった。

学生たちは、とにかくパンクの修理と、部品が届いていない中で今できる車両の調整をきっちりすることとした。そして、いよいよ試運転。

車は、フェラーリ校に隣接する駐車場内を快調に走り、学生たちも車に慣れるため、交互に運

転をし、感触を確かめていた。

いきなり駐車場に変わった車が走り始めたため、通りがかりの人たちが足を止め、珍しそうに見ている姿が跡を絶たなかった。

2006年9月3日（日）

部品がまだ届いていないため、午前中は、現時点でできる整備をし、午後からは、マラネロ市の計らいで、フェラーリ博物館を見学し、その後昼食を摂り、モデナ市の見学に出かけた。夕食中、女子学生の森澤さんの体調が悪くなり、ホテルまで送りどけた。

幸い大したことはなさそうで、とりあえずゆっくり休ませることとした。

明日はいよいよローマへ出発である。荷物が間に合うか不安が残る。

2006年9月4日（月）

フェラーリ校の調整がどうなっているのか、9:15出発予定のところ一向に出発できる状態ではなかった。次第にNAC側に苛立ちが見えてきた。そして、先生のある一言から学生の雰囲気落ち込み、全体にいやな空気が流れ始めていた。

S・R号を積載車に乗せ、我々とイタリアのチームの一行は、それぞれの車に分乗し、11:00過ぎようやく出発することができた。そして、18:00過ぎレバンテ計画出発地であるローマに到着した。

本日の宿泊場所は、ローマ・アウレリア街道にある“キャンピング・ローマ”でトレーラーハウスでの宿泊である。

19:00を少しまわったところで、待ちに待った荷物が届いた。みんな一様にほっとした様子であった。

出発を明日に控え、夕食後、少々ナーバスになっている学生たちを部屋に集め、一杯やりながら、今までのこと、また、今後について思いを聞いてあげることにした。学生たちも不平不満心配事等色々胸の内を聞かせてくれた。

そして、最終的には「とにかくこのプロジェクトを成功させ、最後においしいお酒を飲もうぜ」と変に盛り上がり、みんなの意識を一致することができた。明日からの走行が楽しみになってきた。明朝6時に最終の作業を行うためもう寝ることとし、学生たちも自分たちの部屋に散って行った。時間は23:00をすでにまわっていた。

2006年9月5日（火）

早朝6:00S・R号をキャンプ地駐車場に移し、昨夜届いた荷を開け最終整備を行った。学生たちは、眠い目をこすりながら集合し、先生の指示により各々が作業を始めた。しかし、ここで新たな問題が勃発した。時間の都合でソーラーカー本体を発送してから取り掛かったキャンピ

作製が裏目に出たのであった。

車体に装着してみたところ、ハンドルを目一杯切ったとき、ハンドルの一部がキャノピーに接触することが判明した。今から補修することもできず、キャノピー無しで走行することとした。

13:00過ぎ警察の先導でキャンプ地“キャンピングローマ”を出発、チームのキャプテンである宮崎君の運転で、ローマ歴史地区にあるポポロ広場までパレードをした。

観光客で賑わうポポロ広場に到着する

と、瞬く間に人垣ができた。そこで車両展示およびデモ走行を行い、このプロジェクト最初の環境問題に対する啓蒙活動を行った。

16:00ごろ脇学長、ニコ校長、マラネロ市長によるテープカットが行われ、走行距離600kmの長旅の幕が下ろされた。



最終調整をする学生たち



ポポロ広場を出発

しかし、スタート直前ブッチの燃料電池車がマシントラブルにより出発を断念してしまった。走行隊は、アウレリア街道・環状道路で警察の先導車と別れ、その後、我が隊のみでタルクイーニア・ニードを目指し走行した。イタリアでは一般道と言えども時速70km、110km制限というところもあり、見守っているこちらもかなり緊張した。そうこうしている内、MULO号（フェラーリ校）、AEMILIA号（アイデア）の順に次々とリタイヤしていったが、我がNACカーだけは順調に走行を重ねて行った。

1日目のゴール地点がことのほか遠く、しかも出発時間が遅かったことがたたり、日暮れの間になってもまだ到着できない想定外の事態が起きてしまった。

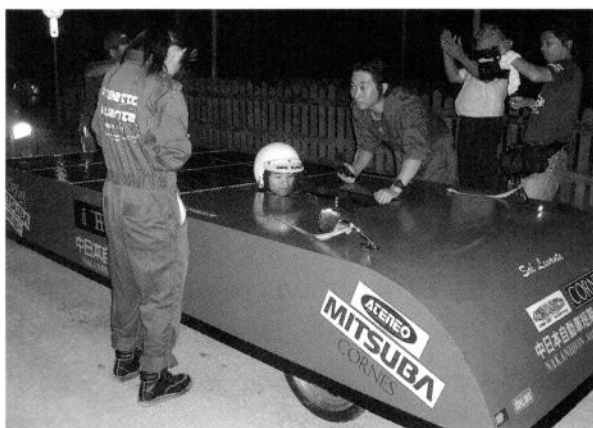
ソーラーカー（太陽の下を走る乗り物）ということで、前照灯が無く、途中のスーパーで懐中電灯を買い、その代わりにして走行を続けた。

夜になり、交通量も増え、走行予定の道幅も狭いため、経路を変更したのはいいが、先導車が道を間違えますます到着が遅れていった。当然充電もできず、バッテリーの残量も心配になって

きた。

時計が20:30を少し回ったころ、先行隊に出迎えられ何とかタルクイーニア・ニードのキャンプ場『トゥシャ・テレーニカ』に到着。ドライバーの木下君は、想定外の悪条件の中、必死で運転してきたことからの開放から思わず笑みが浮かび、また、みんなからも自然と拍手が起こった。本日の走行距離は100km程であった。

イタリア側のアバウトな計画が浮き彫りになった。これも、国民性とあきらめる以外ないのか…。22:00過ぎ夕食をとり、とりあえず明日に備え寝ることとした。明日は日の出と共に充電が待っている。



やっとゴールにたどり着いた木下君

2006年9月6日（水）

早朝より学生らが、ソーラーパネルを太陽に向けバッテリーの充電に努めた。

9:00過ぎキャンプ地を出発。

順調に走行するも、前夜の走行でバッテリーの残量が低下しており、一抹の不安があった。

出発前と昼食時に時間を惜しんで充電作業をしたが、思うほどの充電はできておらず、不安はつのるばかりであった。



充電作業に励む学生たち

14:30、昼の休憩を終え再出発。これからは、上り坂の多い行程となる。

そして、ついにその時が来てしまった。上り坂の途中、電流不足になり休憩を余儀なくされてしまった。先を見ればまだまだ続く上り坂。協議の結果、仕方なく坂の頂上付近まで牽引してもらうこととなった。

頂上付近でロープを外し再自走。約60kmのスピードで快調に下っていくもまたもや上り坂に、バッテリーが危ない。その後、アップダウンが続き、

とうとう18:00過ぎに車がストップ。学生たちが押して坂を上るもギブアップ。

本日の目的地シエナまではまだまだ先、積載車にて車を運ぶことにした。

シエナ到着後、シエナ歴史地区“城壁”から“サリンベニー広場”までパレードをし、広場で車両展示及び環境問題の啓蒙活動をした。

その後、車をシエナ市営の電気バスの整備工場に保管し、夕食へと向かい、食事後キャンプ場へ着いたのは、24：00を既にまわっていた。みんなの疲労は相当なものになってきた。

2006年9月7日（木）

朝、森澤さんが起きてこないため、様子を見に行くと体調が悪いとの事。今後のことを考え、走行隊を一時離脱させ学長一行が宿泊しているホテルに移し、病院で見てもらうこととした。

森澤さんの体調を心配しつつ、走行隊はポッジボンシ“エンリコ・ベルリングエール広場”へ向かい出発した。

しかし、本日の行程もアップダウンが激しく、おまけに、片側一車線の交通量の多い道で、およそ14km 走ったところで、安全面とバッテリーのことを考え、積載車で“エンリコ・ベルリングエール広場”の手前3 km 地点まで運ぶこととした。

そこから“エンリコ・ベルリングエール広場”まで自走し、パレードに参加、その後、広場にて展示と啓蒙活動をした。近所の住民らが多く集まり盛況であった。



シニョリア広場にて記念撮影

14：30、時間の都合もあり、S・R号は積載車にて、本日の目的地であるフィレンツェ“シニョリア広場”に向かい出発した。

予定時間を1時間半ほど遅れ、フィレンツェに到着。パトカーの先導で、“シニョリア広場”までパレードが行われた。

有名な観光地ということもあり、車、人で大変ごった返した中、広場に到着した。

広場に着くと、あっという間に人垣ができ、大盛況であった。研修旅行中の本学の学生や教職員も駆けつけてくれ、過酷な行程の中、ほっとするひと時でもあった。

19：30広場を出発、フィレンツェの市役所の駐車場に車両を置き、本日の予定を終了した。



あ然！本日の宿泊場

その後、車にて宿泊場所であるキャンプ

場“プラス・キャンピング・ミケランジェロ”へ。到着すると一同啞然。小さなテントを2人で使用。しかも電気も通ってなく、ただ寝るだけの場所であった。

2006年9月8日（金）

過酷なテント生活も何とか切り抜け、多少の疲れが残りつつ、朝食後車両が置いてある市役所の駐車場まで移動した。

予定では、そこから白バイ先導で市内をパレードすることとなっていたが、例によって？連絡がうまく伝わってもなく、すったもんだの末結局中止。



快調に走るソル・レバンテ号

その代わり、渋滞が激しい市内を少しでも早く郊外へ出られるように、警察が誘導してくれることになった。安全面を考え、S・R号は積載車で運ぶことにした。

移動中、市内は本当に交通量が多く、パレードをしなくて良かったとさえ思えた。

警察官もかなり協力的で、赤信号でも他の車を止め優先で進めてくれたり、緊急車両しか通ることができない道も通らせてくれ、まるで、VIP待遇の様であった。

警察官の粋な計らいの甲斐あって、スムーズに市内を抜けることができた。本日のコースは峠がきついため、S・R号を山の頂上付近まで運んでもらい、そこからモデナに向かいスタートすることとした。

木下君の運転で自走開始。

時速4 km程で順調に走行。今日こそは満足できる走行ができるのではと期待が膨らんだ。

途中ポツレッタ・テルメで昼食をとり、午後の走行に備えていた矢先天候が急変。にわかに黒い雲に覆われ、雨が降り出してきた。

みんなで祈る思いで空を見上げていたが、いつまでたっても止む気配が無く、雷まで鳴り出してきてしまった。モデナまで走りたい一心で辛抱強く粘ってはみたが、結局断念せざるを得なくなった。

しかし、S・R号を運ぶための積載車が他の車両を運んでいったまいつまで経って



雨の止むのをひたすら待つ隊員たち

も帰ってこない。そのうち事故に巻き込まれ遅くなっているのが判った。

結局18:30ごろ積載車が到着し、30分後出発することができた。未だ雨は止む気配が無く、疲れきった我々は、21:00ごろホテルに到着した。

いよいよ明日は、最終日！ 晴れてくれ！

2006年9月9日（土）

本日最終日晴天。

体調を崩していた森澤さんも元気になり合流、全員で9時にホテルを出発し、マラネロから13km 地点バジジョラーマまで移動をした。

そこから警察車両の先導で、10:00過ぎに出発し、一行は一路マラネロへ向かった。

天気も申し分なく、我々S・R号もすこぶる順調である。



ゴール間近！一緒に走る学生たち

ゴール近くになると伴走の車から学生たちが飛び降り、S・R号の後ろを走り出した。

拍手の嵐の中到着！メンバーたちのバンザイは続き、みんな様にほっとした表情となり、そして、日に焼けた顔から白い歯を覗かせ、満面の笑みへと変わっていった。時計はちょうど12:00を指していた。

こうして波乱に満ち溢れた、長いようで短い我々の挑戦は、幕を閉じた。

総走行距離391kmで当初計画の600kmには遠く及ばなかったが、そ

途中、この企画の協賛企業でもあるRCM社へ寄り、社長の計らいでちょっとしたパーティーを開いていただき、そこでシャンパンを片手にゴールの前祝をした。

気分は徐々に盛り上がり、いよいよ終点地に向かい再出発。ドライバーは宮崎君。

大渋滞もなんのその。マラネロ市民の方々や研修旅行中の仲間が待ち受けるゴールへ…



バンザイ…見事ゴール！

れに代えがたい大きな何かを残すことができたと確信している。

ゴールの余韻に浸っている中、顔をこわばらせている学生が一人いた。宮崎君だ。彼には、まだ15:00からエンツォフェラーリホールにて、市民を対象に市長、国会議員、教育長らそうそうたるメンバーが出席する環境問題についてのシンポジウムの中で発表するという大仕事が残っていた。

時間になり、会場を除いてみるとホールはほぼ満員。200名以上の聴衆が今か今かと始まりを待っていた。シンポジウムが始まり、宮崎君の順番がやって来た。彼は、堂々と大きな声で通訳を交えながら発表することができ、観衆から大きな拍手を貰うことができた。ご立派！

この遠征での体験で、学生たちは一回りも二回りも大きく成長することができたことを、本当にうれしく思えた瞬間でもあった。

その後、今回の遠征で楽しみにしていた一つでもある、フェラーリ・フィオラノサーキットでのデモ走行が行われた。

ここは、普段フェラーリの車両（もちろんF1マシンも）をテスト走行する場所で、一般車両は入ることができないところで、まして、日本の一般人がここを走るなんて事は、まず考えられない、フェラーリファンにとっては聖地のような場所である。



疾走するR・S号

我々は、シンポジウム会場を後にし、逸る気持ちを抑えながらサーキット場へ乗り込んだ。そこで、誰がドライバーをするのか興味を持ってみると、学生たちは、「この遠征で僕たちを最後まで支えて下さった先生たちに是非乗ってもらいたい。」と、自分たちが乗りたい気持ちを抑え、そう言ったのです。学生たちの気持ちが非常にうれしく、本当にいいチームだと改めて思えました。

デモ走行では、佐々木先生、清水先生の順にソーラーカードライバーとして、みんなの気持ちを乗せ、我が『ソル・レバンテ号』は、気持ちよさそうに疾走した。

デモ走行終了後、夜には、今回のプロジェクトにかかわった全ての方達がそろい盛んにパーティーが行われ、長いようで短かったこの『レバンテ計画』は終結となった。

おわりに

このソーラーカー『ソル・レバンテ号』による、イタリア走行プロジェクト『レバンテ計画』は、イタリア初日の、荷物の未到着から始まり、いろいろなことがあった。

この旅で、日本人の物事に対するこだわりや神経質さに対し、イタリア人のいつも明るく、一

見楽観主義的なところ等，国民性の違いを，つくづく思い知らされた。

しかし，異国の地で，異国の人たちと目的を一にし，寝食を共にしていくうちに，ことばの壁や思想の違いに関係なく仲間意識が芽生え，それぞれを尊重しあえるようになって行き，日頃の生活では味わえない尊い経験を得ることができたこと，また，今一度，自分を見つめ直す事ができたこと，ほんとうにありがたく思いました。

また，学生たちにとっても，この数日間で，心身共にたくましくなり，確実に成長することができ，今後の人生においてこの経験が，必ず役に立ってくることを確信しております。

このような機会を，私たちに与えてくださった，神野学園，中日本自動車短期大学，フェラーリ工業専門学校，そしてマラネロ市の皆様に深く感謝をいたします。